

夏のおでんは火傷が怖い：練物語

鴨鶴嘴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

借間で一人暮らしをしていた一般大学生の多田力也は、夏におでんを食べたくなつたのが災いし、異世界トリップする羽目につ！

異世界は、見覚えは無くともどこか懐かしい雰囲気。付喪神との遭遇、新たな危機、深まる絆。練物が紡ぐ物語が始まる。

目次

| | | |
|-----|----------------|----|
| 1 話 | ちくわの向こうはファンタジー | 1 |
| 2 話 | 合縁奇縁でまた明日 | 22 |
| 3 話 | 飾りじゃないのよ | 36 |
| 4 話 | 幽霊みたいなエトセトラ | 48 |

1話 ちくわの向こうはファンタジー

今の状況を端的に言おうと、俺の左腕が肘から先までちくわに飲み込まれている。

一刻の猶予も許さない危険な状態が続いていて、一人じゃどうにも出来ないからどうか助けに来てください。

——ああ、駄目だ。こんな文句じゃあいくら真実を語っていたとしても、言葉の端から可笑しさが溢れてきて、いたずら電話の内の一つだろうと冷たくあしらわれるに決まっている。というか、ちくわの三文字が致命的過ぎる。いったいどうしたものか……。

俺は残された右手でスマートフォンを起動させて電話帳を開いたまではいいが、それからは画面の上で親指をさ迷わせていた。

というのも、上記にもあるように余りにも現実離れした事態である。友人に画像添付メールを送れば手の込んだイタズラとTwitterのネタにされるのがオチで、電話越しで相手に信じてもらえない自信がまるつきり持てない。自分以外の誰かに頼ったところで、なんて説明すればいいのかに窮した俺は、発信ボタンをタップ出来ないでいたのであった。

どうしてこうなったんだ？

混乱している脳は思考の停滞を許すことは無く、どうにかこの問題を解決しようと、現状に至るまでの再確認から足掛かりを探る方向に移行した。

俺は今日、恐らく俺の人生で最低最悪のピークにあたる日に……。日没後からの予想外だった急な冷え込みに、体調を崩してしまふ兆しを経験則から察知し、夜はおでんを食べて汗を流そうと思いいったのだ。

そして初心者マークが新しいシルバーのパルサーに乗って、最寄りのスーパーでおでんの材料と安売りしていた菓子パンを買おうと、帰宅後に手早く味噌おでんを作ったのである。

時間の問題で大根はまだ味が染み込んではいなかったが、上々の出来に満足していたと記憶している。その後は……：そう、残った味噌おでんが腐らないよう冷蔵庫にしまおうとしたとき、俺は何となく鍋の蓋を取り、ちくわを摘まみ食いしようとして——
「どうしてこうなった？」

持ちきれず床に落としたスマートフォンは、無操作から三分の経過でスリープし、ちくわは既に俺の首から下までを飲み込んでいた。

今はもう、何をすることも手遅れである。

傍から見た今の俺の姿は恐らくこけしのようで、かなり滑稽であろう。そんな自分を

嘲笑する気力さえもが、失せてしまっていた。

こんなことなら、昨日一口三百円の宝くじを二十枚買ったお金で、おでんよりもっと美味しい物を食べてりやよかつたなと後悔しながら、俺は現実逃避に目を瞑った。

◎二〇

ちくわに飲み込まれてから、早くも三十分が経過していた。というのも、ちくわの中は歯抜けの口でモゴモゴされているような緩やかな圧迫と蠕動運動が続くばかりで、死ぬとばかり思っていた心境にも少しばかりの余裕が生まれ始め……、そうなつてくると行き急ぐ現代人らしいいつもの癖で、左腕の腕時計で現在時刻をマメに確認していたのである。

最近の時計は水晶の振動がどうたらでまず時間がずれることはないと聞きかじった覚えがあるので、経過時間はまず確実だろう。

「真つ暗ならパニックになつていたところだろうけど……まあ今んとこ、部屋の灯りが透けてて視界を確保出来るし、酸欠で息が苦しいってワケでも無いしなあ……ふあゝねむつ。つて、いかんいかん」

三百六十度モチモチなちくわの内側はちよつとしたベッドのようでもウトウトしかけ

たが、緊張感を維持せねばツ!!と己に渴をいれた。

変化が起きたのは、そんな時だった。足の先に触れた、形ある何かの固さを感じ取ったのである。依然としてちくわトンネルに終わりが訪れた気配は無く、それは驚くことに、時を同じくして向こう側からこちら側へとちくわに飲み込まれた、殆ど同じ境遇の人間の足であつたのだ!

◎二〇

「いやはや、お互いこの度はとんだ災難で。お前さんがそつちから来たってーと、そつちにも出口があるんですかい?」

「そうですね。貴方と私はまるで通信ケーブルを移動するウンゲラーとゴーストのように、プレイヤー、いわゆる神の意志によって強制的に別の場所へ交換して送られている最中なのでしょう。ちくわで交換させる神はきつと禄でもないヤツだ」

「へっ? んーとまー、よくわからんが禄でも無いってのはまったくの同意見だ。……なんだか俺たち気が合うな。どうも他人のような気がしねえ。魂の波長が合うっていうか」

「それは、お互いキツキツなちくわの中ですれ違つてるんだから。魂の波長どころか、心

音までドクドク聞こえてますよ。そろそろ顔の辺りがすれ違うんで、右に避けて下さいね」

「へいへい右な……さて、それは俺から見ての右なのか、お前さんから見ての右なのか。そこんところはつきりさせねえとお互い不幸なすれ違いが」

「上手いこといつてる余裕はあるんですね。鏡写しの左右は、ととつ、頭の上下逆だったか。だとすると、あれ？どつちが右だっけ?!」

「おいおい！そつちがしつかりしてくれねえと困るよ。俺はこういう、もの考えるのが苦手なんだ」

「えーつと、貴方から右で、私も右でいけるはずっ！……たぶん」

ちくわの中で俺は初対面の男とファーストキスしてしまうかもしれないという、かなりレアケースでデンジャラスな遭遇を体験してしまいそうな……割と平和で地獄な窮地に貧していた。こんな状況だから、語彙力の低下も仕方ないな。

ちよつと待てよ？と冷静になって、互いの顔がすれ違う最後の最後で鏡写しなら反転しているのだから、左右を誤った事に気付いた俺は、全力で仰け反ってデンジャラスを滑り込みで回避することに成功した。していたのだが……。

すれ違う瞬間垣間見た男の素顔。男は目を固く瞑っていたが、それが他人にしては余りにも似ている、とはとても片付けられない程に見慣れている自分の顔と瓜二つで。

俺は驚きの余り仰け反る力が抜けて、男の無防備な唇へとダイブした。

「おええ、くっくっ」

二人の汚らしい空えずきの声が、ちくわの中で暫し響いた。

「お前には、末代までちくわに食われる呪いをかけてやるッ!!」

俺に瓜二つな男は、恨み言を残して去って行った。ちくわの緩やかな蠕動運動で。

また一人になって。

俺はこの後一体どうなってしまうのだろうか。深く深く思考の海に沈み込んだ俺はありうる可能性を模索したが、長かったちくわトンネルの出口の方が、確かな答えを得るよりも先に迎えた。

「ハッ!?、ハッ!?はっ!」

◎(二)

「ハッ!?は……どっ!?だよっ!」

畳に土壁、障子に穴あり。用途不明な物々は婆ちゃんの家で見覚えのあるような、生活に役立つ道具の数々。

随分と古風でこじんまりとした一室には、立派な戸棚が開きっぱなしになっていた。

立ち上がり戸棚の中を覗いてみると皿の上に見紛うこと無きT H Eちくわが一つ、こちらに口を向けて待ち構えていた。

俺は軽く目眩を覚えた。

知らない部屋、開きっぱなしの戸棚にちくわ……これらの情報から導くに、どうやら俺はこのちくわの口から異世界に吐き出されたと推測することが出来る。

「さて、着替えるか」

大胆にも茶筆筒から藍の着物と濃茶の帯を取り出し、下着はそのままに俺はこの世界に合った服装に着替え終える。これもまた推測だが、ここはちくわですれ違ったあの男がこの世界で住んでいた場所である可能性が非常に高い。

だとするとだ。あの男は気味が悪い程俺に似ていたもので、江戸川乱歩の小説みたたく、似た容姿を利用して成りすましてみるのが取り敢えずはベターだと考えたのである。

俺は早速、慣れていない下駄を履いて、怖々と歩き出して表に出た。そして振り返り。

「ここは……つと、長屋だよな？ソレっばいよなあ。おーい、その人。あなただよ、あなた。ここは俺の住んでる長屋で合ってるのかい？」

桶に溜めた水を柄杓で撒いている少女がいたので、記憶の中の男の口振りを思い出しながら努めて真似て、これ幸いと話しかけた。というのも、自分の家の前でも無いのに水を撒くとは考えにくいので、これは向かいの長屋に住んでいる人物に違いない。この

少女ならあの男を知っていないにしても、見覚えぐらいはあるだろうという、前向きな予想で声をかけたのであったが。

「あ、ああ、あのお、貴方はその、でも……やっぱ私が見えますの？」

何寝ぼけたこと言ってるの、みたいな小言を一つくらい言われる覚悟はしていたが、まずはその桶の水を自分の顔に掛けることをこの少女に勧めるべきじゃないだろうか？

現にあなたは今、ここにいるじゃないか。と反射的に言いそうになった言葉を、俺は咄嗟に飲み込んだ。

ここは話に聞く昔の日本に限り無く近いが、そっくり同じではなく差異のある世界、異世界なのだ。異世界の常識を知らない俺が、見えたらおかしい人を偶々見つけて捕まえてしまったというのなら、それは今後喜ばしい展開になるとは考えにくい。ソースはラノベ。

……まあ話しかけたその時、既に手遅れなのだ。

孝行町娘Aとしか認識していなかったのを改めて、よく見れば櫛の通った黒髪に美しい顔。化粧つ気が無い健康的な素肌と髪型が幼い為少女に見えるが、背丈は成人女性のものである。

彼女は頬を上気させ、困惑となぜか喜びが混ざった表情で、——いわゆる絶望と開

放感が絢い交ぜになった、あのお漏らし顔にととても似た表情——暗い瞳を潤ませ、上目遣いにこちらを覗いていた。

「気のせいです。さようなら」

いやな予感に従って、自分から声を掛けたクセに、言葉早口に拒絶を意思表示してさつさと逃げようとした。

「その反応は、ぜえーったいに見えてますね!? 確信しまし……ちよ、逃がすかーっ!!」
桶と柄杓をほっぽって、彼女は両手で俺の両足をがっちり抑え、股下に頭を潜り込ませるようにタツクルを決められた。そして鮮やかに足を絡め取られてしまう。

「うぐっ?! す、すみませんでした! タツプ、タツプだつて! 見えてますうー、あなたがちゃんと見えていますからこれ以上四の字固めされると折れちゃう!!」

「じゃあ、逃げずに私の話を聞いてくれますか?」

「実は急ぎの用事が」

「ほおう、といたしますと?」

「さつきから齒に葱が挟まつて、楊枝が欲しいのが用事だったり……なんちやつて」

「……えいつ」

「聞きます聞きますッ! それは俺にかなり効くう!!」

「じゃあ、今貴方が出てきたお部屋で、腰を据えてお話ししましょう♪」

彼女は上機嫌に俺の首根っこを引つ張つて、勝手に人の部屋へと入ろうとする。まあ俺の部屋でも無いのだから、文句は言えない。

これほど大騒ぎしているというのに、徹頭徹尾周りの道行く人達は子供を除いて皆どこか白々しく、その姿はまるで見えてはいけない見えない何かに怯えているかのようであつた。

◎(二)

「私、柄杓の付喪神で、名を熊くまい囀なゆ七夕と申します」

俺はお茶を一口飲んでからこう言つた。

「柄杓の付喪神いー?」

我ながらかなりアホっぽい声が出たが、それを気にする余裕が無い程に、この少女、熊囀七夕が言い放つた言葉を咀嚼するのに難儀していた。

視線をさ迷わせ、すると笑顔で俺の反応を待つ彼女の右手が、禁断症状のようにふるると震えていることに気がついた。

「何、震えちゃつてどうしたの? 体調悪いなら帰る? それは助かる」

「まだ帰れませんよっ!?!……ただ、その。日課の途中だったといいますか。毎朝水撒き

をしないと落ち着かなくて」

「しないとうなるのよ?」

「私達、神の中でも下級な付喪神は、人に認識してもらわないとだんだんと存在が薄くなって、タンポポの綿毛を吹いたみたいに、パツ……と、消えてしまうんです。ですから、私は柄杓の付喪神らしく毎朝水を撒いて歩き回って、今日は涼しかったな——っていう人の認識を集めなきゃいけないんです」

「存在を認識……手段が間接的なのは、付喪神が見える人の全体数が少ないから?」

「それもあります。ありますが、そういった見える人、私達は巫女気質の高い人と呼びます。彼らの信仰は最上級のもので、独占欲の強い上位神は私達がおこぼれを貰う隙を作りません。って、こんなこといちいち説明しなくても知ってましたよね。”人”と話す機会が無かったから、私いつもより饒舌になっっているように……気に障りましたか?」

「いやいやあ、へーそうなの。全く知らなかった」

「知らなかった!?……いや、だからこそですか。貴方のような、弱っている付喪神まで見えるとても高い巫女気質を持ちながら神の加護を受けていない人がいるのは、もうっ奇跡なんです! 私、貴方に認識されたお陰様で現在進行で絶好調ですよー、ぶい!!」

彼女はピースではなく、両手をダイナミックに上げてのビクトリーポーズをとった。そのとき、男の目を引く彼女の膨らんだおっぱいがぶるんツ!!とダイナミックに揺れ、刹那の間重力に逆らって浮き上がった胸の谷間が、少しはだけた着物から一瞬だけ、ひじき程の黒い線が見えた。

瞬間、俺の灰色の脳細胞に稲妻が走る。

彼女の言うことをすべて肯定すると、彼女は柄杓の付喪神で、人に認識されないと自分という存在が希薄になるのが神という存在らしい。存在が希薄になればますます人に認識されなくなり、いつか消えてしまう恐怖があつたに違いない。

そこに都合良く現れた俺は、霊感が特別強いかという理由で、彼女が見える。それによつて彼女は元気になつた——

——つまり、人に見られることを全く知らないで育ってきたが故に、異性に対して無防備な七夕ちゃんの谷間の奥の桃源郷を拝むチャンスは十二分にあるという事実が、一瞬の内に導き出されたのである。

「どうしたんですの?急に前屈みになつて」

「七夕ちゃんのことか、うっ、よく分かつたからね。一人で大変だつたらうに……涙が出そうなのを、堪えてるんだよ」

「あつ……その、私つてやっぱり可哀想、なのかな?たはは、っ」

「……その言葉は、駄目だ。言わせちゃ駄目だろ俺ッ」

涙を堪えてるとの言は勃起を隠す為の言い訳であったが、彼女の引きつった空笑いの虚しい響きがぐつと胸にこみ上げてくる物があり、俺は知らず知らず本物の熱い涙を零し、素早く手のひらで拭った。

「なあ、七夕ちゃん」

「?何ですか」

「腹減ったし、一緒にこのちくわ食おうぜー」

いい笑顔でサムズアップして、戸棚のちくわを取り出した。

そのとき。

ちくわの口から抗いような無い絶対的な引力の渦に、俺の体は引き寄せられた。

◎二〇

先程まではちくわも皿の上でおとなしくしていたというのに、突如としてまたちくわに吸い寄せられてしまった。おそらく俺のどつた行動の何かがトリガーとなって、その猛威がまた振るわれようとしているのだが。

いやっ、今はこんなことよりも、回避せねばっ！

俺は一瞬の硬直の後に、咄嗟の行動で右手に持つ皿を畳の床へと放り投げ、後方へ素早く飛び退いた。運良くちくわの腹に皿が乗って、吸引力が弱まった。九死に一生を得て、冷や汗がどつと噴き出す。

「何をそんな、お皿が」

俺の突然の奇行に、何が起きているのかが分からない様子の熊囀七夕ちゃん。彼女の方はちくわに吸い寄せられていないのだろう、事実ちくわは俺だけを器用に吸い寄せているようで、慌ただし物音を立てるのは俺ばかりになる。

だから二人の認識の違いがそうさせた。七夕ちゃんは悪気があって、偶々ちくわの上に乗って押さえつけていた皿を拾い上げたのでは無いのだ。

皿の欠けが無いかと七夕ちゃんが確認しているとき、俺は再び猛烈にちくわへ吸い寄せられていき、どうせ伝わらないと半ば諦めながらも、切羽詰まって彼女に吼えた。

「そのちくわはただのちくわじゃない！まだ巻き込まれて吸われていない今のうちに、とっとと逃げてくれッ！」

俺は腹這いになって、藁にも縋る思いで畳の目に爪を立てる。しかし爪は毎日専用のやすりで磨いていたのが仇となって、つるつるりと滑ってしまう。そもそも、畳の目は縦だったので、現状に一縷の希望も無かった。足の爪先がヒヤリと冷たくなる感覚に、怯え震え上がる。

「……ちくわ、このちくわが慌てさせる要因なんですね」

危険だから逃げて、君を巻き込みたくは無。そう言ったつもりだったのに、七夕ちゃんは俺を救おうと思考を巡らせていた。その気持ちは嬉しいのだけれども、この急場では怒りが込み上げてきた。

「アホか！何も出来ないからさっさと行けって」

「アホで結構、この大馬鹿野郎！伊達や酔狂で助けようなんて思っちゃいけません。私には要因に心当たりがあつて、私ならもしかしたら何とか出来るかもしれないんですよ！」

「そんなこと」

助かるなんて、考えてもみなかった。この異世界を詳しく知らない俺には思いつかなかつた要因が七夕ちゃんには心当たりがある可能性はなるほど至極当然で、七夕ちゃんを巻き込むことをあつさりを受け入れた。

「……俺はどうすればいい？」

「何もしないでください。私の話を聞いて、偶に相槌を打つ程度で楽にしてくれれば結構です」

七夕ちゃんは着物の皺を気にせず腕まくりすると、目を薄く開いて大きく息を吐いた。俺はちくわへの抵抗を辞め、案の定右手親指をちくわに飲み込まれた。ここからじ

わりじわりと膨らんで、全身を飲み込んでしまうことを俺は身を持って知っている。

もちろん不安もあった。が、七夕ちゃんの覚悟を決めた目を見て、全てを任せて胡坐で居座り、信じぬく覚悟を俺も決めたのだ。

「ふう、では。……そうですね、私は熊囲七夕と申します」

「改まって自己紹介？存じ上げておりますがー」

「そうではなくて、まだあなたのお名前を聞いていなかったものですから。教えてください。たつていいでしょう？」

「ああそれは確かに、失礼だった。俺はオリバー・カー」

「嘘はいけません。そんな顔じゃあないでしょう」

言い切る前から嘘だと見抜かれてしまった。なかなか鋭い。俺の声が上ずって、さも今から嘘をつきますよーという雰囲気を感じていたことを加味しても、即答か。成程覚えておこう。

「なに、冗談を交えた事実確認だよ。笑って許せ。俺は多田力也ただりきやつて名前だ。今度は嘘じゃない、本名だ。覚えるときは、その者、ただ力也なり……つてかつこよさげに覚えるといい」

「力也さん。では、私の名前は熊に囲まれて七裂き、夕日の赤が映えるぜっ！の熊囲七夕と覚えてください」

「うわあ、これは酷い。七夕ちゃんはもうちよつと女の子して」

「??私ずつと女の子ですよ。……さて、自己紹介はまだ終わってないんです。一度話しましたが、私は柄杓の付喪神。姿形こそ似せていますが、人間ではありません」

「似せている、つて?」

「はい、人間に親しまれる姿に似せているんです。私より上位の神には動物の姿だったり、植物の姿だったりと様々な形がありますが、本質はどれも違いがありません」

「人の認識を集めて、認識に生きるのが神」

「もうちよつと複雑ですが、今はそれに理想に生きています、も付け加えてくれればいいです」

「へえ……分かる気がする。神様はそういうものであつて欲しいな、つて。姿形に囚われない……七夕ちゃんもしかしてだけど、その心当たりつてまさか!」

「ここまでの流れから、間違いない。つまりこの拳を飲み込んでいる最中のちくわは、一種の神的存在なのだ。」

「考えてもみれば、おでんのちくわは筒状、だし汁を飲むのに、ストローのように扱って吸うことが可能である。そして一説では蚊や蝶もちくわの形状からヒントを得て、血や花の蜜を吸うようになったと聞く。もしかしたら、空から黒い石板が降ってくるよりも前からちくわは存在していたのかもしれない。ビックバンの衝撃は、世界とちくわを

作った……。

古くからあるということは、人間の尺度でいうと、それだけで神秘を帯びる。

以上、ちくわ⇨神である場合を前提に広げた思考を、一度落ち着いて、客観的になつて考え直してみる。

「無理があるなーって」

「何の事かは知りませんが、恐らくこのちくわは神隠しの媒介ですね。それを除けばただのちくわです」

「神隠し、神様が人を攫うっていうアレ？」

「そのアレです。上位の神の中には、気に入った人間の舌に刻印を刻み、例えどこへ逃げ隠れても見つけ出して、機が来ると媒介を使って手元へと誘うことが出来たりします。離れている距離によっては、複数回に分けるそうですが。心当たりは……あるようですね」

orzというヤツだ。俺には身に覚えがあった。

『皿熱いし、ましてや誰かいるワケでもねえ、ちくわで汁飲もつ……アチツ!!』

この時舌に刻印とやらを刻まれたのだろう。

横着はするもんじやないね、罰があたってしまった。

「どうすれば、神隠しを回避出来るんだ？」

要因はよく分かった。反省もした。だが、話し始めてからずっとちくわに念力的な何かを注いでいるような仕草をしている七夕ちゃんの行動理由が分からない。何かをしているのは分かるのだけど……もしかしたら妨害電波でジャミング的な事をしているのかもしれない。

「分析完了。すう~~~~~つ……………爆ッ!!」

次の瞬間、俺の右腕にあつたちくわは爆発四散した。

「やった！神通力を使うの初めてだったけど、上手に出来ましたよ、ぶいー!」

見事、俺の腕は衝撃の大ききの割に目立った外傷一つ無く、ちくわから開放されていた。

だが失った代償は大きく、突然の爆発に俺の心臓は太平洋の彼方へとカタパルト射出されてしまった。

「あゝ、助かりましたよ力也さん。私にお礼の言葉を言うなら今ですよー?」

「……………」

「……………」

「このけしからんダイナマイトおばーい娘めツ!!驚き過ぎて心臓が止まったかと思つたわ!爆発する珍品柄杓として質屋に売り飛ばしてやるっ」

「し、質屋はいやーっ!?あそこに置いてある道具達って、陰険で嫌がらせしてくるんで

すう……それに比べてここにある道具達はみんな気さくな好い道具ばかりで居心地がいいって言うかあー話を聞いてー！」

俺は七夕ちゃんの柔らかい手を握り、外へと連れ出そうとする。しかし畳に根を張った大木が如く微動だにしないあたり、向こうの方が臂力で上回っているのだろう。多田力也の名が泣いている……父ちゃん母ちゃんごめん。俺は口だけ大きくなっただけど、運動は今も苦手なんだ。

そろそろ停戦にしようかと力を抜くと、七夕ちゃんがきよとんと見上げてきた。

「何です……ここでも絶対に動きませんかよ？あと自慢じゃないですが、私って貧乏神も裸足で逃げ出す一文無しです。ついでに養え」

「千年の恋もマツハで氷河期に突入する台詞やめろ。なんだ、開き直ってからとことん凶々しいなあ七夕ちゃん!?さては本性を隠していたのか。恐ろしい娘ツ」

「……あはは、本気にしちやいやだなあ、勢いで口をつけて出た言葉というか、さすがに冗談ですよもういやだなーあはははははっ……はあー。自分の身の回りのお世話をしてもらうほど、私、偉い神様じゃありませんから。家事手伝いは私に任せてもらって、お互い助け合っていきましょう、ね？」

「まあそれなら……居候してもいいよ、と言うとも思ったか！」

「ちえっ……惜しかったなあ」

「まあ、いいんだけど」

「え?……いいんです? 気が変わらない内に誓いを破つたらあらゆる穴という穴から致死量手前まで出血する契約をしてもいいですか」

「もう何でもいいよ……おつかない契約だな! いつそ殺してやれよ。もう少し優しい契約で、あとちよつと不安になったから、一年更新の契約で」

「いいですともいいですとも!」

俺の目の前で今、胸の高さで手を揉んでニコニコ笑う七夕ちゃん。知れば知るほど強かで、どこまでが演技だったのかは不明だが、裏の見える善意というヤツは、案外気持ちがいいものだと知った。

悪いヤツじゃないし、返しきれない恩が出来た。それにここは俺の家でも無いのだから、そもそも偉そうなことを言える立場ではない、黙っておくが。

やってきた付喪神は福の神か、はたまた貧乏神か。おそらく後者。どちらにしても、退屈はしないだろう。

「よろしくな、熊囀七夕ちゃん。その名前、よく似合ってるよ」

「ありがとうございます? それって」

「さて、仕事探すか」

俺は不安にさせる一言を残して、部屋を出て玄関扉を開けた。

2話 合縁奇縁でまた明日

さて、どうしたものか。

仕事を探さなければ、それすなわち無収入であり、食べることに困るだろう。餓えを凌ぐ為プライドを捨て、草の根を食むようなひもじい生活を送る……なんてのはまっぴら御免被りたい。

自分にはどんな仕事が出来そうなのかを考えながら、歩きだした。

とりあえずは、人が多く流れていくのに身を任せて、散歩のようなペースで歩きながら辺りを観察していると、葦簀よしずを立て掛けた茶屋で気になった大人の男が二人、どちらも真剣な表情で盤上遊戯をしていたので驚いた。この異世界にも、ひよつとしたら将棋やチェスみたいな物があるのかなあと、ちよつと首を伸ばしてみたが、盤面を見てもいつそ清々しいぐらいさっぱり意味が分からなかったので、思わず引き笑いが漏れてしまった。

平たく薄い円に加工された油石のようなものには、朱でミミズがのたくったような字が書かれている。それが字によって別の役割りを持った駒だというのは経験則から分かったが、それだけだ。好奇心がどんどん萎えていくのを感じた俺は、また人波の中に

戻った。

「……お腹空いたな」

思い返せば昨夜に食べた味噌おでんを最後に、何も口にしていない。というか、睡眠が足りていない。

何故ちくわの中で寝なかったのか、今更に後悔をしても、もう遅く。緊張の連続で無理矢理に引き出された元気の帳尻合わせが、今の疲労として返ってきた。血の気が引いて、視界が揺らぐ。

「あつ……これ、駄目なヤツだ、うつ」

一瞬の隙に巴投をくらったような浮遊感と、俺を置き去りにして回り始めた景色。

俺はおぼろ気な意識の中、体育の授業中にペアを組んだ柔道部の友人から習った受け身の仕方を走馬灯のように思い出していた。

『いいか？脇の下に手刀を入れて、手をつかずに前転したら思いつ切り手ひらの面でバアーントツと畳を叩く!!』

上手く出来ただろうか。柔道部の友人の像が、サムズアップして透けていく……合格点は貰えたらしい。

気が付くと俺は、仰向けになった全身で、和かな陽光を浴びていた。体の力が抜け切って、とても気持ちがいい。

抗えない睡魔にもう、何も考えられなかった。



「ええー、つとお……う？」

「おお良かった、気がついたか。心配したんだぞ」

疑問符だらけの頭に、額を手で押さえながら恐る恐る声をかけると、鮮明で透き通ったとてもイイ声で返事が返ってきた。

だが、初対面の人からの、身内だけに見せる自然な笑みをさも当たり前のように向けられる覚えは記憶にない。面食らってしまった俺は、体が硬直する。

そもそも、ここはどこなのだろう。

寝ぼけた頭も次第に起きてきて、心当たりを探そうと記憶を辿っていけば、そういえばあのときに眩暈を起こして倒れて、そのまま道で寝てしまったんだっ—と他人事のように思い出す。

それが自分のことだとはつきり認識したとき、嫌な汗が噴き出してくる。

こうなってしまったのは、異世界に来てからの時差のせいも少しはある……と言いつても、人通りのある場所でいきなり寝てしまうなんて失態は、自分にとっては一生

の恥じであることに変わりなく、はにかみ屋な少女のようにカツと赤面する。

それから気分はエンジェルフォルムもかくやの急降下をみせ、滝壺があつたら底に
ずつと沈んでいたいような憂鬱な気分になり、手は顔を覆い自然と深く長い溜め息が漏れ
た。

「うあああ……あ、最悪だ」

「こらっ、お前というやつは……、はあ。人が心配したと言つてるのに、最悪は無いだろ
う。道端で転がっていたお前を背負つて、ここまで汗をかいて運んでやったのは誰なの
か、教えてやらねば礼の一つも言えないのか？」

自分のことだけでいっぱいいっぱいで、ここにもう一人いたことを忘れてしまつてい
た。百面相の一人芝居が悪い誤解を招いたことを悟つた俺は、慌てて訂正する。

「えっ？……ああ、違う違う、それは関係なくて。最悪なのはこつちの話でさ。誰かは知
らないけど、本当にありがとう。運んでくれて？だよ。助かりました」

俺は頭の下に敷かれていた座布団を退けて上体を起こし、床板の上で正座を作つて頭
を深く下げる。三秒ほどの静止の後、頭を上げると呆けた口に珍しいものをみるような
眼で見つめられていた。

「……それは私をからかっているのか？知らないことは無いだろう」

困つたような笑みで、すぐに気づくような冗談がバレたのだからと、俺から種明かし

をするのを期待されていたようだが、口を噤んで何も答えられない間が暫し空くと、それはだんだんと剣のある目つきに変わっていき、疑われているのがひしひしと伝わってくる。……その間、俺は状況を把握するために時間を費やしていた。

少し言葉を交わしてなんとなく分かったことが、彼はおそらく、俺に瓜二つでちくわの中で遭遇したあの男と俺とを勘違いしていて、なおかつ瓜二つな男と縁深い間柄だったということだ。俺が迂闊に余計なことを話し出すまでは、その態度の全てに親しみが込もっていたのを覚えている。

俺は勝手に納得がいったけれど、知る由も無い彼には今から弁解をしなければいけない空気が出来ている。さて、ここは正直に答えるべきか。否——

「どうやらあなたは、一方的に私のことを知っているご様子で……それが他人の空似でなければですが。自分は今、多田力也と名乗っています、それを聞いた——」

「知らぬ名だ」

言葉の先を読んで両断する、冷やかな怒気を孕んだ短い否定に、うぐつ、と息を飲む。表情筋が強張るのを感じたが、まだ俺の話聞いてくれてくれているこの好機を逃してはいけないので、気合いを入れ直して再び口を開く。

「なるほど。聞き覚えは無い、と。……これは信じていただけじゃないかもしれませんが、話をさせてください。実は、今朝目が覚めてからというものの、それ以前の自分に纏わ

る、あらゆる記憶がさっぱり抜け落ちておりまして」

「記憶が無い？」

「ええ。目覚めたら過去の記憶が無いんです。それはもう、何もかもが。まるで浮世から一人取り除かれたような心持ちで……とても恐ろしかった。それからは部屋をひっくり返して、誰か、何か知っているものがないかと右も左も分らないままに外へ飛び出して。迷い続けて。その宛の無い道半ば、疲労で倒れてしまったようです。……そして、見知らぬ恩人であるあなたに拾われて、目の前にいる、という状況なんです」

「そんなことが、いやしかし、本当に……近くでよく顔を見させてくれ」
「どうぞ、構いません」

構わないとは言ったが、パーソナルスペースが違うようでも無遠慮に鼻先が近づいてくる。無意識の内に半身後ろに仰け反ると、「動くな」と叱られてしまった。……ただじつと観察され続けているのも居心地が悪く、つまらないから退屈しのぎにと、こちらからも彼の顔を観察することにした。

例えるなら、アニメティストに美化された那須与一とか、周瑜のようだというべきか。アジア人特有の切れ長な目は涼やかで、唇は薄く口回りに髭の気配が無い。髪は男にしては長い黒髪で、色白の肌は日に焼けても赤くなるだけだろうと容易く想像ができる。嫉妬するだけ無駄なタイプの美男子だった。

そんなこんなで心の中で盛大に舌打ちしたところを不意打ちに、俺の腕が掴まれて、胸の高さまで上げられる。

彼の細い目が刹那の間、見開かれたのをみた。

「っ！その着物は、何度か見た覚えがある。この前一緒にすき焼きを食べに行ったとき、菊助が着ていたものに違いない……」

「そうですか」

「肉を箸で摘まむときに、小皿の醤油で袖に染みをつくっていた、そう、これだ。ははっ、気が抜けるとことんなやつだと、あのときは思ったものだ。……本当に、何も思い出せないのか？ついこの間のことなのだが」

「その……分からない。話ぶりを聞くに俺は、菊助って名前なのか。なんだか、他人の名前みたいな響きだ」

「そうか。そうなのだな……、！私の名は分からないのかっ、話は出来るのだから、物の名前のように覚えていることはあるかもしれないぞ！」

「……すみません」

「そうか……、別に、お前が謝ることでは無い」

それからは会話が途切れ、重い沈黙が降りる。すっかり気落ちした彼の様子に良心の呵責を感じ、胃が痛む。

俺は自分の保身のため、エゴに突き動かされて平然と嘘をつき、記憶を無くした『菊助』であると騙ったのだ。それは人間の生き方として、許された行いではない。

だが、だからといって本当のことを言えただろうか。

『菊助』は俺と同じ神隠しの目に遭っているのを、俺は知っている。七夕ちゃんが言っていた神隠しと距離の関係性を考えれば、『菊助』は異世界からきた俺とは違ってこの世界の住人。上位神とやらの元に直接誘われている可能性が高かった。

それが何を意味するのかを俺はまだ正確には把握していないが、七夕ちゃんから聞いた神の寵愛、独占欲。座敷牢から神に信仰を捧げ続け、老いていく人間のイメージが瞼の裏を過った。

……ちくわの中で『菊助』とすれ違ったのは、いくつもの偶然が重なった結果かもしれない。だが、たからこそ、俺は因果めいた何かを感じずにはいられなかった。

「——ああ、お前の目を見ていて分かった。本当に、私のことを忘れてしまったようだ。……今は力也といったか。突然私のような者に知り合い然とされて驚いただろう？だが、私と菊助は気の置けない無二の友人で、喜びや辛苦を二人で分かち合った仲だったのだ。……それは真実で、変わらない。そして、記憶の有無で人の魂の在り方までもが変わることは無いと、私は信じている！だから、また一からいい、私の友人になつてはくれないか？」

その言葉に胸が張り裂けそうで、息が苦しい。それでも俺は震える声で力強く、言葉を探しながら答える。そうしなければならなかった。

「その……菊助のことを、そんなにも想ってくれて、ありがとう。記憶の無い俺がありがとうって言うのは、本当は筋違いかもしれない。白々しいと怒りを覚えるかもしれない。けど、俺にしかな言えないことだとも思うんだ。……本当に、ありがとう。変わってきたこんな俺だけど、また友達になってほしい。この気持ちも揺るがない真実だと、俺は信じていたい」

「うっ、ううっ……酷いやつだ。そのようなことを言われては……ああ！本当に酷いやつだお前はっ、勝手に記憶を無くすのだからッ!!そのくせ、そのくせに……、何一つ変わっていないのだから……うわあああん!!わたしは……は……っ!!」



突然腕が俺の両肩へ伸びてきて、ガツシリと掴まれた。

それからは顔を伏せて、少し痛いぐらいに肩を何度も叩いてくるのは、何か言いたいことがあるようにもみえる。

俺はそれを、忍耐の心でただ受け入れるのに徹してしばらくすれば、肩を叩く手も止んでボチボチ落ち着いてきたらしい。今度は手ぬぐいを取り出しのを見てから、俺は明後日の方を向いて胡座をかいた。

空を仰げば刷毛で薄くひいたような雲が、遙か上空の風に吹かれて、巻いて、散っていくのと、流動的に変化している。

ただ、青空には変わらず太陽がさんさんと輝いていて、異なる時間が流れているのだな、と感じた。

「まといばはじめ的射場一だ」

「へ？……ああ、名前が」

「そうだ。まだ、名乗ってもいなかったからな。……力也について、私もいろいろ考えてみた。それでな、大切な話がある」

横に並んで座った気配はしていたが、振り向くことはせず。今はスッキリとした表情で語っているのが、柔らかな声音の雰囲気から察せられた。

「ん、分かった」

「大切な話というのはだな、力也が今借りている長屋を引き払って、しばらくは私と一緒にここに住むのはどうだろうか、真剣に考えてほしいんだ」

ゆつくりと時間をかけて、俺は静かに口を開いた。

「……いって、一の家なの？」

「そうだ」

菊助が住んでいた長屋や見てきた町並みから考えると、この家は一代で興したとは思えない程度には立派であり、なので二つ返事にそうだと返ってきたのは純粋に驚きだった。

「もしかして、高名ななんとかの御曹司だったり？」

「いやははつ、そんなに期待されてはもてなしに困ってしまうな。……物置になって使っていない部屋もいくつかあるし、それは後で片付ければいい。そのときはもちろん私も手伝うのだが……、どうだろうか？」

もう候補の部屋とか決まっていそうな話の進み具合にブレーキをかけ、否定的な視点から、後の蟠わたかまりになりかねないような問題があるかを考える。……この時点で俺もかなり乗り気じゃないかと、セルフツツコミをいれたくなるが、自重する。

「えーつと、その、うん。……本音を言えば、お世話になりたいと思う。けど、大変だぜ？人の一人や二人、増えるとなるとそれはもう勝手が違うしさ。一緒に暮らしてる家族にも迷惑をかけるし、やっぱり——」

「その心配はいらない、私は長いこと一人暮らしなんだ。だから迷惑をかける家族はいないよ。……父は先の戦争で。母はお産が悪く、私を産んですぐに亡くなったと、祖父

に教えてもらったことがある」

自分の失言に気が付いた俺は、唇を噛む。

「ごめん……酷いことを言ってしまった、悪かった」

「忘れてしまったのだから、仕方ないさ。それよりも！もう気にやむことは無いのだから、決まりでいいんじゃないか」

ばつが悪そうに俺が言うのとは対照的に、はじめ一の中では決着がついているのか、あつさりとした返答と、それよりも一緒に住むのかが気になるといった様子だ。

「そうだなあ……そうなんだけど。変な道具が増えたり、貧乏風が吹いても、恨まないか？」

例えば予告なしに爆発する柄杓だったり、貧乏神も裸足で逃げ出す無一文の付喪神だったり。……聞かずにはいられなかった。

「そのときは、そのときに考えるさ！そうだろう？」

その樂觀的な考え方と胸を張る姿につられて、俺もなんとかなるんじゃないかという気がしてくるから不思議だ。

そもそもの、人間の器の大きさが違うのだろう。はじめ一がどつしりと土釜なら、俺は茶碗ぐらいの大きさで。……想像しただけで、ホカホカの白いご飯が食べたくなってしまう。

それはさておき、俺の心はもう決まっていた。

「それじゃあ世話になるよ、ありがとう。俺はお前がいいヤツ過ぎて、少し心配になってきたところだ」

「むっ、私を世話好きで底抜けのお人好しと思っではないか？もしそうなら、それは違うと言わせてもらおう。私は誰にでもそうするわけじゃないし、例えば枯れそうな花を見て心を痛めることがあっても、水を与えはしないし、その必要もないと考えている。なぜなら」

「はいはい、分かったから」

「いや、それは分かっていないときの顔だ。人の話は最後まで聞けとガミガミガミガミ……」

どうやら面倒なスイッチが入ってしまったようで、俺は話し半分に聞き流して、話題を変えようと試みる。

「ああー、はい。以後気をつけます。それで、空き部屋の話もあるわけだけど」

「そうだ、いいことを言ったな。そのことなんだが、私に考えが——」

.....

それはひとまず後に回してさ。そろそろご飯にしようって、言おうとしたんだけどなあ……。

俺の思いは徒いたずらに宙を舞うばかりで、引越しの計画が着々と進むのだった。

3話 飾りじゃないのよ

借りた荷車を引いての帰路。

一に道案内は必要かと聞かれて、口頭の説明だけで十分だと断つたのだが、今思い返せば俺は運ばれて一の家はじめにいたわけで、見覚えが無い辺りの景色に不安が次第に募っていき、自分は正しい道を進んでいるのかと、何度か自信を喪失しそうにもなった。

それでも言い含められたとおりに大きな道を歩いて行けば、見知った茶屋が右手に現れて、遠くに長屋も視界にとらえたところで生きた心地が戻ってきた。

それからは表に荷車を置いておくことにして、猫の額ほどの土間に履物を揃えて脱ぎ、障子の縁に手をかけた。

「七夕ちゃんは、いたいた。今帰ったんだけど」

「ああ、力也さん。私も日課を済ませて戻ったところですよー」

七夕ちゃんも日課の水撒きの続きを終わらせていたようで、それはもう、ぐでぐんと
いう擬音が聞こえてきそうならいの寛ぎっぷりであった。

「そうそう、話しておきたいことがあるんだけど」

「なんですかあ〜」

「引越すことが決まったから、それと並行していくつか要らないものを紹介してもらった質屋で売ろうと考えてる」

「あの話は冗談じゃなかったんですか?」

一瞬にして臨戦態勢に入った七夕ちゃんの切り替えの早さに驚きつつも、そう言えば珍品柄杓（要資格：危険物取扱者）として質屋に売り飛ばすとか言っていたことを思い出し、誤解を招いたことを知った。……因みにあのときは、一ミリも冗談で言ったつもりは無い。

「あはははは、心配しなくても大丈夫だって。表に荷車を手配してあるから、二三人乗っても余裕だよ」

「ビックリするほど計画的ですねっ!この人でなし!ーッ!!」

予想通りのいいリアクションに、実家のような安心感を覚える。むしろくしゃしたらまたこのネタを使おうと、心の内で密かに決めてから、気持ちを切り替えるのの一つ手を叩いた。

「ははっ……さあ!冗談はこのぐらいにしておいて。時間もあまり無いからてきぱきやろう。七夕ちゃんも整理手伝って」

「あつ、はい。私では判断がつかないと思いますので、生活必需品とそうでないものに分けてまとめますね」

「あいわかった。重くて一人じゃ無理そうなのを運ぶときは、よろしくね」

まずは着物等を整理しながら、着てきた服や腕時計をどう処理しようかと逡巡して、布でくるんで紐で縛り、とっておいて未来の自分に判断を委ねることにした。

いざ整理を始めると、最初の分類こそ時間が掛かったがそこはあくまで長屋。たいした広さの部屋でもないの、予想より早くに終わった。七夕ちゃんの要領の良さに助けられたところもあるだろう、劳いの言葉を掛けて、荷車へといらぬ道具を運ぼうというときに、予想外の抵抗があった。

「その、道具を質屋に売るのはやめませんか？」

「なんでさ」

哀しい色をした強い眼差し、その熱量の出どころを測りかると、続きを促した。

「すいません、質問で返しますが逆にどうして売る必要があるのですか。こんなにもいい道具達なのに……」

「ああ、付喪神。それでか……引越し先は友人の家の余った部屋を借りるんだけど、あまり多くの物を持っていったら迷惑をかけると思ってさ」

七夕ちゃん自身が質屋に売られるのは嫌だと言っていたのだから、売られる道具達に同情したのだろう。なまじ道具の気持ちも分かる付喪神なのだから一入で、俺は建前の理由を述べた。

「そうですか分かりました……ただ、これだけは言わせてもらいます。力也さん、力也さんの頭と道具達の想い。どっちが重いと思いますか？」

視線がぶつかり合った状態で、沈黙が流れる。

これは関係無い話だが、年若いクレーマー相手には、目力で凄み、目をそらさせれば勝ちだと聞いたことがある。なんでも今の自分が世に聞くクレーマーであるという自覚と、体裁がどうなので、目をそらした瞬間に燃えるような怒りも萎むらしい。

俺は脱力したため息を吐き、荷車へと視線を飛ばした。

「せっかく下衆柳亀太郎げすやなぎかめたろうって人がやっている、いい質屋を紹介してもらったんだけどなあ……あーもうっ！俺の負けだよ。質屋の件はなしなっ！さっさと引っ越し終わらせよう。うん、そうしよう！」

「すいません、我が儘を言つて……失礼なことも」

「そんなことよりまずは箆笥運ぶから、七夕ちゃんそっちの側面、倒すから端持つて。ぼやぼやしないでさ」

「はいっ、そうしましょう。うふふ」

「持ち上げるよ、せーのっ！」



家具等を載せて荷車を引くのはどうも人の目を集めるようで野次馬もいたりしたが、最後の三往復目にもなつてくれば、周りもあまたか、と落ち着いてきた。

今は荷車の上で割れ物の注意を七夕ちゃんに頼んでいるが、一二往復目のときは横と一緒に七夕ちゃんに引いてもらわないと荷車を運ぶことが出来なかつたのには筋トレをするべきでは？と真剣に考えたものだ。

「そういえば、軽い頭を下げる必要もなかつたな」

「的射場一さんでしたか、嫌な顔一つするどころかご機嫌でしたね。それと、この通りで嫌味を言うのと頭にたん瘤が増えるつて噂がありますよ。怖いですよね」

「きつとその通り魔は、柄杓のようなもので背後から頭を殴つたに違いない」

「人間きが悪いですねえ。私なら道具をそんなことには使わず、右ストレートで殴ります」

「七夕ちゃんらしいや」

そんな下らない話をしていけば一はじめの家に着いたので、荷車から先に七夕ちゃんに降りてもらつて、割れ物を運び始める。

縁側から上がつて障子の奥の部屋に入つて先に運んだ棚に手に持っていた茶器を納める。作業を二人で進めれば早く、借りた荷車が空になつたので言われていたとおり堀

の側に荷車を置いた。

「直に暮れだな」

独り言の言葉尻に重なって、遠くて鐘の音がいくつか鳴った。

「引つ越しは終わつたようだな」

向こうから「が歩はしめてきて、話しかける頃合はしあいを見計らつていたらしい。

「ああ、部屋を空けるのを手伝つてくれてありがとう。助かつたよ」

「それはよかつた。さて、夕食が出来たから来てくれ」

「それを聞いて、涙が出るほど嬉しいよ」

空腹を通り越して鈍い胃痛があるだけだったのだが、足りない生活に自分が順応し始めていたのかもしれない。それでも夕食と聞いて嬉しいのだから、まるでわんぱくな子供みたいだ。

「行つてきてください。私は部屋で先に休んでますね」

そう言つてはにかむ七夕ちゃんは俺の脇をきつと抜けていつて、一度振り返つて控え目に手を振つた。

七夕ちゃんの姿は、一はしめには視えていない。

きつと用意されている夕食の膳も二人分で、それを七夕ちゃんも察しての言葉なのだろう。

そのことが念頭にあった為、背を追う言葉は喉で止まり、視線だけで見送った。

「どうしたんだ？」

「いや、なんでもない」

はじめ

一「の作つた夕食は美味しかった。後で縁側を少しだけ借りると言つて別れ、それから用事を済ませて部屋に戻ると七夕ちゃんが寛いでいた。

「力也さん、付喪神つて人間の食事はいららないんですよ」

「いきなりだな。人の認識だったか」

「そうです。だから付喪神はお金なんていららないんですよね。どうです、羨ましいですか」

「……俺は生きるのに苦勞をしていたワケじゃないから、それは羨ましくないかな、別に。なつたらなつたで面白そうだけど」

「面白そう？変なことを言うんですね。どうしてです」

「いやさ、俺が思うにお金が人をその土地に縛り付けるワケで、生きる為だね。だから無くていいなら多くのものを足を使って見て回れるよなつて」

「目的もないのに旅をしても、きつと寂しいだけだと私は思いますけど。そういう考えもあるんですね」

「そうだ、縁側で体を拭こうと思つてたんだ。はいこれ」

俺は笹の葉の包みを七夕ちゃんに手渡すと、不思議そうな顔で七夕ちゃんが受け取った。

「なんですかこれは、まるで……」

「おやきみたいなのが売ってたから、つい買っちゃった。俺は縁側に行くから、二つ食べてなよ。俺の分の一つは食べるんじゃないぞ」

「力也さん、私は付喪神なんです。だから受け取れません」

今日何度も見た真剣な表情で、笹の包みを返そうとする手を上から握って、俺は口角を上げてニヒルな笑みを作った。

「ほら、付喪神でも神様なんだから。お供え物とでも思っただけ食べてくれよ。夜の寝つけがよくなるとか、御利益があるかもしれない」

慣れない笑顔でじっと見つめていると、表情筋の限界が近く震えだす始末。明日からでも筋トレを始めようという決意を固めたころ、ようやく受け取ってくれた。

「もう……こんなこと、本当は駄目なんですからね？あと、体を拭くならこの桶を使ってください。夏だからと油断して、夜風に肌をさらし過ぎては風邪をひきますから、程々にですよ」

「ありがとう。じゃあ水を汲んで……うわっ!?勝手に水が溢れて」

さつきまで空っぽだった桶が半分まで水で満たされて、急に重くなったので手を離し

そうになったのを寸前でなんとか堪えることが出来たが、頭の中は疑問符で溢れていた。

「その桶はあと一年もすれば付喪神になりますからね、頼めばお湯にだつて出来ますよ」「へえ！付喪神すごいな、今日一番のカルチャーショックだ……！」

俺は桶と手拭を持つて障子を抜けて早速縁側へと出た。すつかり夜の帳が降りた紫の空を見ながら、体の汚れを落としていると、馴染み深い白い輝きの星に重なつて一つ、大きな赤い星が空に浮かんでいるのに違和感を感じた。

「不気味だなあ」

手拭の水気を絞つて広げると、桶の水を一度捨ててまた水を出し、お礼に桶を手拭で拭いてまた水を捨てた。こんなに水を捨てたらはじめに怒られないかとも思ったが、そのときは素直に謝ることにしよう。

「桶を貸してくれてありがとう。濡れてたから縁側で乾かしてるけど、良かったかな」

部屋に戻つて、「三つ目」のおやきを食べている七夕ちゃんを細目で見ながら聞いてみた。

「そうですか、いいですよ。後で取りに行きますモグモグ……」

「美味しいか？三つも食べてるもんなあ」

「ええ、とても美味しかったです」

価千金の眩い笑顔に、怒る気力が失せる——なんてことはなく、七夕ちゃんの柔らかなほつぺたを摘まんで引つ張る。

「いつそ頬が焦げたおやきみたいに赤黒くなるまで、摘まんでやろうか。三つ目は俺の分だつて言つたよな。このっ、このっ」

「ひんっ、痛いれすよ。もうつたら！食べてくれつて言つたのは力也さんですよ。私はしつかりそう聞きました！」

赤くなつた頬を擦りながら、逆に七夕ちゃんから怒られていると、何かが致命的に矛盾しているような不快感が込み上げてくる。

「食べてくれつて、そういう意味じゃ……駄目だ。怒つてもおやきは戻つてこない。せめて一言謝つてくれ。そしたら許せそうな気がするから」

「ごめんなさい。反省しています」

そう言うのと素直に七夕ちゃんは頭を下げ謝つた。俺はその隙に右手の中指に力を込めて、開放する瞬間を待つた。

「食べ物への恨みを知れっ！」

頭を上げた無防備な額に狙いを定めてでこぴんを放つたが、七夕ちゃんの危機察知能力が上回つて、半身後ろに避けられてしまった。

そこからは一転攻勢、膂力で劣る俺は七夕ちゃんの間接技から逃れる術はなく、ノリ

で絶対服従を誓わされ、泣きが入るまで苛められた。

「……惨めだ、俺は自分が情けなくて泣きそうなんだ。痛みで泣いてるんじゃない」

「すみません。私途中から楽しくなっちゃて、やり過ぎました。自分でもコントロール出来ないくらい元気が漲って仕方ないんです」

「なんだよそれ、付喪神は戦闘民族かよ」

畳に伏す俺の背中を優しく撫でられていると、慰められているようで悔しかったので、起き上がって自分の布団を敷いた。

「……じゃあもう、俺寝るから。おやすみ」

「おやすみなさい。私のこと、嫌いになりましたか？」

「……寝て明日になったら忘れる。気にするな」

「よかった、じゃあ……本当に、おやすみなさい」

その声があまりにも近く、耳もとから聞こえたのに驚いた。心拍が早まり、若干の期待を胸に寝返りを装って振り向き薄目を開けてみると、そこには予想の右斜め上の、燐光を帯びた柄杓の姿が枕元にあった。

「違う。そうじゃないだろ……ちきしょう」

『久しぶりの布団は温いですねえ、ふわあ……』

部屋に豆電球の明かりが無いと安眠出来ないタイプの俺は、柄杓型ランプと違って今

度こそ寝ようと思うと、今だかつて無いほど早く眠ることが出来たのだった。

4話 幽霊みたいなエトセトラ

微睡みの中の寝返りで、ふと目が覚めた。

すっかり夜暗に馴染んでいる臉は、ほんの数ミリ小指を動かす程度の意思力で閉ざせば、またいくらでも眠れそうな気配であった。けれど、障子紙を透かした向こう側。柔らかな星明かりの静けさが綺麗で、呼吸をするように自然と、それを見ていた。

気まぐれな風が吹いて、庭の柳がさざめく葉擦れの音。

崩さないよう気を使いながら布団を抜けだしたら、熱っぽい体を確かめるよう腕に力を込めたり抜いたりして、寝返りで崩れていた服の肩の位置を整えた。

足の爪先から畳を迎えるようにして、物音を最小限の軋みに抑える。夜中に気配を殺して歩くのは、さながら幽霊になったようで可笑しさがある。

障子の縁を掴んで、人一人が通れるぐらいに横へ滑らせる。部屋の中よりも湿気った外の空気を吸い、開けた障子はそのままに縁側へと踏み出した。

手頃な場所を探して歩んだ先には大きな木の柱があつて、それを背にして座り込んでみる。

・
・
・
・

ここまで気まぐれに身を任せていたけれど、布団の中にいた方が居心地がよかった、というのが本音だ。粹人を気取るのはこのぐらいにして、早々と布団の中に戻ることを俺は決めた。

燐光もすっかり消えて、ただの柄杓にしか見えないそれが枕元にある景色は、ちよつと可笑しい。下がっていた布団をその端を掴まんで上げて、彼女の耳(?)に掛かるぐらいにしたら、大きなあくびと背伸びを一つ。このまま夜明けを待つことにした。

何倍にも長く感じる時間が流れて、醒めている頭が瞼の裏のスクリーンに取り留めのない光景を映す。

暇なときに過去を振り返って反省するのは、誰にでもあることだろう。……一人反省していると、あのとときとった自分の行動に驚いたりするのだから、二十歳を過ぎたら人は変わらないなんて言葉はいい加減なものだと思った。

……あるいは。こんなことがなければ、これから社会の歯車に組み込まれて痛感するはずだったのかもしれないが。

「ん、^{はっめ}「か……?」

人の気配がしたので独り言を漏らすと、縁側を歩く何者かの気配がピタリと消えた。いや、正確には消えたのではなく、どうやら立ち止まっただけらしい。障子には人の影が落ちていた。

『私は長いこと一人』

あのとき一はしめはそう言っていたけれど、結構なお屋敷だ。使用人の一人や二人、雇っていても別段おかしくはないだろう。ここにきて一人も、紹介されてはいないけれど……。

俺の不安を煽るように庭の柳がまたさざめいて、女のものに見える長い髪の毛が宙に踊る。

障子の向こうを確かめるべきか——確かめよう。決心が付くのと同じく、障子越しの女はその細い声で俺に話しかけてきた。

「旦那様、ではありませんね。……の、お客人ですか」

「はい。独り言のつもりが聞こえたようで、すみませんが忘れてください。何もありません」

「……ええ。私もあなたには何もありませんから」

幾つの言葉を交わしたのか、はつきりとは覚えていない。気づいたときには足音は随分遠退いて、聞こえなくなっていた。俺は少し乱暴に布団に潜り、冷えた体を温めた。

◆ 「昨夜はよく眠れましたか」

「ああ、お陰様でね」

畳の上に投げ出された俺と、投げ出した七夕ちゃんとの朝一番の会話である。

今に至るまでの理由は単純明快、寝ぼけていたら七夕ちゃんに布団を引つpegされたのだ。それを理解した後に立ち上がり、布団一式を畳んで積んだら、隅に寄せた。

「私は日課がありますので、お先に。お昼には戻ります」

「あい分かった。じゃあね、いつてらっしやい」

「はい！いつてきますね」

眩しい笑顔を見送って、今度は自分の身支度を整える。履物を取りに玄関へ向かう途中、廊下で一と顔^{はしめ}を会わせた。

「おはよう……ん、元氣そうだな。一夜を過^ごして何か不自由はなかったか？」

「大丈夫だ、ありがとな。……いや、ちよつとしたことを聞きたいんだけどな、使用人は雇っていたりするの？ほら……色々大変だろう。手伝えることがあつたら俺を手足みたいにこき使つてくれていいんだぜ」

「……そうだな。昔は家の中にも何人かいたが、今は見張りの役に男を一人雇っているよ。それはさておき、何か困つたら、そのときはお前にまた頼ることにしよう」

「任せとけ……そうか。んじゃ、俺は用事があるから行くよ」

話しながら玄関にまでできていたので、こころで話を切り上げようと思い、目配せを送る。なぜか一も横^{はしめ}についてくるのを少し疑問に思っていたが、その疑問は視線を察した

風の一が答えてくれた。

「言い忘れていたが、私も今日は務めがあるので屋敷を空ける。今のお前は隙が多いのだから、悪意を持って近づくと人間には気を付けるんだぞ」

「お前は俺の母親かつてな。大丈夫だーって」

「ふむ……どうやら自覚が足りていないらしい」

説教の空気を感じ取った俺は、恐る恐る顔色を窺う。そこには皮一枚で守られた、菩薩のような顔があつた。

「分かった気を付ける。だからそんな恐ろしい顔をするなよ。な？」

「やれやれ、分かったならいいんだ。またあとで会おう」

「ああ」

門の前で別れてからは思考を切り替えて、俺はさつそく調べものに取り掛かった。

「その幅の広い道の先には、お城があつたりするんですかね？」

話好きそうな茶屋の奥さんに、お代を払う際にそれとなく聞いてみた。

「やだね、滅多なこと言うんじゃないよ。この先にはお社があるのさ。旅の人かい」

「すいません、不慣れなもんで」

頭を下げて早々に立ち去ると、俺は奥さんが指差した方、お社のある場所へと向かう。半時も歩けば、平地にある森のようなのが近くに見えるようになって、両手には木々

が鬱蒼とする踏み固められた道の、そのさらに奥へ奥へと進んでいく。

石段を目の前にしたところで、疲労した足を休める為にそろそろ休憩をしようという考えが過る。考えながら手拭いに額の汗の滴を吸わせて、石段の先を仰ぎみた。

「うわあ……。体が第一、それがいい」

追い越して階段をいく人達の流れから外れると、木陰に吸い寄せられて、木に背を預ける。ここは涼しい風が吹き抜けるようで、しばらく休めばだいぶ調子が戻りそうだった。

「ねえ、お兄さんはさっきから何をしているの？」

「ん、休憩をしているんだよ。日向は暑いからね」

「……………ふーん」

ぱつと見小綺麗な身なりの子供が話しかけてきたので適当に返事をしたのだが、さつきから視界に入ってきては注がれる子供特有の無遠慮な視線が気になって仕方ない。話かけてほしいのだろうか……きつとからかっているだけだろう。無視無視。

「……………どうも君は一人のようだけど、君のことを親が探してるんじゃないかな？ そろそろ戻ってあげた方がいい」

「うん。じゃあお兄さんが、かか様のところまで連れてってー！」

良心的な提案を提示してあげたら、この子はどうも、迷子らしい。

どうして俺がそんな面倒を、と喉元まで出掛かったが、グツと堪えて言葉を選んだ。「悪いが他をあたってくれ。その優しそうな老夫婦とか、頼めば同情して親身にしてくれるだろうよ」

ちよつとキツめの言葉になったが、これぐらい言えば子供でも「自分に優しくしてくれない方の人」だと理解してくれるだろう。

休憩を終えた俺は石段へと向かおうとすると、何かに服をギュつと掴まれた。……何かとは、流石に白々しいか。振り向けば予想どおりの子供の姿がそこにあり、予想外に涙を溜めてひどく傷ついた風の顔でしゃくりあげていた。

「どうして、ダメなの？ ひつく、ひつく」

「あー、その。俺は親切振り撒くような殊勝な性格じゃないんだよ、きつと」

「意味がわかんないよつ、どうして意地悪するの？ わかんないよう……」

煙に巻こうとして空回りした結果、静かに泣き出した子供の姿をみて、子供の目線の高さに膝を曲げる冷静さの反面、心をかき乱されていた。涙に弱いのは、万人に共通することだろう。

階段から俺を虫ケラのように見る先程の老夫婦の視線が痛い。……はいはい、分かっているって。

「うっ、ひつく、ううっ……」

「俺の声、聞こえるか。話したいことがあるんだ。ずっと泣いてちや、俺には待つか、去ることしか出来ない」

「ん、……え？」

「少し落ち着いたか。この手拭いを使っていいぞ、つてか、俺が拭いてやるから。じつとしてな」

顔の起伏を流れて乾きかけのそれを下から宛がうように吸わせて、目の下を横へと抜ける。それをくすぐったそうに受けるのをみて、なんとも言えない、気恥ずかしい気持ちになって、子供の手に手拭いを渡した。

「鼻は自分でかめるよな」

「うん」

「それやるよ、だから遠慮なく好きに使えつて」

チーンと鼻をかんで、盛大にぐっしりになった手拭いをみて、俺は苦笑いしながらそういった。

「う……汗臭い」

「やかましいわ。そこは遠慮しろよ」

「ふえっ？」

反射的にツツコんでしまい、驚かせてしまった。ぶわつと涙がまた溢れ出す兆しに俺

は、矢継ぎ早に言葉を続けた。

「嘘嘘、冗談。泣きそうになるな。さつき俺が汗拭いたんだよ、悪かったな！」

「……うんっ」

手拭い越しにこもった声を聞いて、胸を撫で下ろす。

乙女心と秋の空、かな……たぶん誤用。マインスイーパーのように、地雷の場所に予め旗を立てれやしないだろうか、くだらない考えが頭を過ぎった。

「よし。君の親はどこにいるのか、だいたいいいから分かる？」

「階段の向こう……でも」

「十分だ。灰色の脳細胞を持つ、この気分屋名探偵が母ちゃんのところまで連れてつてやるさ」

「?……うんっ!」

（ツツコミが欲しいなあ……）

手を差し出すと握り返してくれたので、手を繋いで階段前へ、上る際に手を繋いでいては危ないので一度手を離れたが、登り終わると今度は向こうから自然と手を繋いでいた。

「それで、母ちゃんはどんな人なんだ」

「かか様は優しく、力持ちで、あとね。いつも笑顔！」

「そうかそうか、なら母ちゃん譲りの笑顔なんだな」

「えへへ」

「今頃母ちゃん必死になって探してるだろうから、早く見つけないとだな。どの辺りではぐれたんだ」

「かぐらでん？ つて、かか様が言つてた。そこで待つようにつて言われていたけど、でも……」

「細かい理由はいい、親に反抗して冒険するのもいい経験だしな。後でしつかり叱られる。さてと、神楽殿か。母ちゃんは今日どんな色の着物を着てるとか、何を身に付けてるとか、覚えてるか？」

「いつも白い衣を着てるよ。えっと、あとは分かんない」

「そうか。……ん？」

目測にして約三十メートル前方、人波が途切れて視界が通った一直線の先には、鬼気迫る雰囲気を感じた白い衣の巨大な女性が、明後日の方向へと通り過ぎていった。……額に脂汗が滲む。

「さつき言つてたけど、君のお母様は力持ちなんだつてね。どのくらい？」

「うんつ、力なら大人の男の人が束になつても負けないつて、この前笑いながら言つてた！」

「たぶん見つけた」

「ほんとっ!」

「ああ、見失わないように追うぞ。あっちだ」

後ろ手に手を繋いで小走りに人波を駆け抜けていくと、松並木の下り道の先に白い衣をお互いに確認した。

「かか様だ! ありがとうお兄さんっ」

「よかつたな。じゃあ俺はここまでだ。後は一人でいけるな」

「どうして? 一緒にいこうよ」

「実は急ぎの用事があったんだ。だから、君の母ちゃんと話をする時間も惜しくてな。

それじゃあ、元気で」

「でもっ」

初めに会った時のように、俺の服をぎゅっと掴まれた。母親のところまで一緒に来てほしい気持ちは分かる。

それでも、あの母親とエンカウントするのはヤバいと、俺の本能が警鐘を打ち鳴らしていた。作戦：いのちだいじに。

「聞き分けるって。言いたいことがあるなら、もう今しかないぞ」

「えっえっ、ありがとう。あと今度これを返しに——」

「おう、またな」

キザな台詞の恥ずかしさもあって、小走りになつて来た道を駆け足に上つていく。そろそろいいだろうと足を緩めて振り替えると、ちょうど事の顛末を確認することが出来た。俺の心の中の石川五右衛門も、「絶景かナー!?」と変なテンションで囃している。その時の気持ちはあまり覚えていないけれど、意味もなく深呼吸を繰り返していたのは覚えている。……きつと肩の荷がようやくやく下りて精々するとか、そんなところだろう。



「——ということが、今日はあったんだ」

はじめ
一との夕食の話題に、迷子のことを話していた。始めはハラハラ、楽しそうにしていたのだが、話終えたときには眉をひそめて、顔には「不服」の二文字が書いてあった。

「不満そうだな」

「うむ。迷子の親が見つかったのは良かった。ただ、急ぎの用事と嘘をついたのは、大人の対応としていかなものかと思う。その子の母親は、子の話を聞いてお礼を言いたいと思つたに違いない。なにお前は、浅慮にも、逃げ出したから……。その相手がいないとなると、目には見えなくとも心に貸しと借りが生じる。多少恥ずかしくても、お前はあの場で清算すべきだったのだ。分かったな?」

「はい。すみません。……反省しました」

「よし。そうだ、おかわりはいるか?」

「この空気でも動じないお前は、やっぱり大物だよ……。ちなみに皮肉だからな。それはそれで、おかわりはいっぱい欲しい」

「?お前も、たまによく分からないところがある。お互い様だな」

「んー、要するにだ。どんな気分でも、なんだかんだでご飯が美味しいという事実が変わりはないってことだ!」

青い鳥は食卓にあり、だな。

「そうか、私は作ったご飯が美味しいと言ってもらえて、嬉しいよ」

食事を終えてそれから部屋に戻るのだが、先に部屋に戻っていた七夕ちゃんぐでくん!と、どこかから擬音が聞こえてきそうな寛ぎっぷりを遺憾無く発揮しているのだから頭が痛む。何故だろう、話が違う。

「戻ったんですねー、力也さん。そうそう、今時間出来ましたよね。ちよつと今日私があつた話を聞いてくださいよっ!」

「布団敷きながらでいいなら聞くよ」

「はい、構いません。実は今日、顔見知り程度だった私と同じ、付喪神の方と町で偶々会ったんです!」

「へえー、そうなのか」

俺は敷布団の四隅に神経を注ぎ、布団と枕を掴む。

「それで、どんな方なのかといいますと、それは私が話すよりも当人の口からの方が理解が早いと思いますので、今紹介しますね。硯すずりの六連むつれしずく零さんです」

「来てるのっ!？」

驚きのあまり、俺は敷いたばかりの布団をちやぶ台返しちやぶたいがへしの要領で半分はんぶんに折ひつてしまった。ぐしゃぐしゃになってしまったので後でやり直しになるだろうがいやそれよりも!

「どうも紹介に与りました。六連零です。七夕さんから多田さんのことはすでに聞き及んでいて、一方的に知っている感じです。あははは……突然ですみません」

頭の横に指を揃えた手を当てる、ぎこちなく笑う素朴な彼女は黒い着物に身を包み、長い髪を一房にまとめて肩に垂らしている。

どうして七夕ちゃんに言われるまで正座して座っている彼女に気づかなかったのか。少し疑問には思ったが、まずは居住まいを正して自己紹介をしようと思う。……してやっつたりの顔をして笑っているその柄杓へしやくウー、後で覚えているよ。

「取り乱してしまつてすみません。その柄杓にどんな風に聞いているのかは知りませんが、多田力也です。どうもよろしく」

「(ちらい)そ」

「それで、話の続きがなんだって?」

やや刺々しく、七夕ちゃんに途中だった話の続きを催促すると、それとは関係ない忍び笑いが横から、六連雫という付喪神の方から聞こえてきた。

「今、笑いどころあつた?」

「すみません、私笑い上戸なんです。変にとらないでくださいね。あはははっ、ちよつとしたことがおかしくって」

「そのうち力也さんも慣れますよ。私はもう慣れました。さて、どこから話しましょう……そうですね。私の日課は省いて、その後のことなんです。が、なんやかんやあつて、雫さんと世間話をしていたんです。最近はどこどこの付喪神が消えたとか、新しい付喪神が産まれたとか」

「そこは人とは変わらないな」

「それからは自分達の身の上話になって、私は力也さんの話をしましたら、雫さんが一度会つてみたいとおっしゃったので、問題なさそうなので連れてきました」

「なるほど、分かります。話をはしよりすぎだつて。身の上話からどうして会つてみたいになるんだよ。あと雫さん笑い過ぎだから」

「あはははっ、すみません」

「ほら、私達は付喪神ですから。さつきのことを思い出してください。私に言われるままで雫さんの存在に気づかないまま、布団を敷こうとしましたよね？」

ついさつき、疑問に思ったことを七夕ちゃんに指摘されて、考えてみる。あるとき彼女の存在に気づけなかった理由が、俺の疲労や彼女の影の薄さによるところではないとしたら……。

「ん？そういうえば、なるほど。言いたいことは分かった。つまり雫さんは、だいぶ弱って消えかけていたってことだ」

「あはは、そうなんです」

渴いている彼女の笑い声が、無性に俺を苛立たせる。

「……それで、なに？」

俺の値踏みするような視線に、雫さんは一瞬笑顔が崩れて真顔になり、スタンバイスマイルを取り繕った。……彼女が複雑なのは、今の反応で察した。だから俺は、雫さんの方を向いたまま、焦点だけを遠くへと飛ばした。

きつと彼女は、俺の瞳孔の変化さえも見ている。笑い上戸は彼女の方で、処世術なのだろうと、なんとなくだが分かった気がする。

「——ふふつ、嫌われちゃいましたね。面白そうな話を聞いて、友達のもとへ冷やかしに來ただけなんです。事実確認もできましたし、そろそろお暇しますね。夜分に押し掛けずすみませんでした」

「お気になさらず。七夕ちゃんは見送ってあげなよ」

俺がポーズをとるだけで自己完結するなら、それでもいいと思った。

「ちよつと!?力也さんもっ……この馬鹿ッ!」

部屋を出た雫さん。分かつてるんなら、どうして!と突き刺さるような七夕ちゃんの視線が飛んできて、左へ躲す。肩がぶつかる。

これは七夕ちゃんに恨まれたな、とは頭で理解している。俺にとつての貧乏神はこの一件で愛想を尽かして出ていくのだろうなど、縁側に置いてあつた桶を拾い上げる音を聞いて、半ば確信していた。

この関係が終わるのは惜しいとは思つても、七夕ちゃんに恩返しに優しくする俺であろう、とは思えない程度には、俺にも曲げられない意地というものがあるのだ。

終い終い、寝たら忘れる。いつもそうしてきたじゃないか。

「えっ……っ!」

切り替わつた頭で布団を敷こうと膝をついた矢先、畳の縁に染みがあつたのにふと目がいった。それは——七夕ちゃんの桶に由来する水気であつた。俺は濡れた手で縁

を触り、濡らしていたのが湿度の関係で乾き切っていなかったのだ。——肩がぶつかった拍子にこぼれた、七夕ちゃんの涙だと気づいた。

「はあ？あれで泣いていたのかよ……マジでアホなんじゃねーの。あいつ」

思考が巡る、それは袋小路の筈だった。

思い出が蘇る、それは彼女の表情だった。

血液が煮え滾る、それは——その答えは心にあつた。

「……………つちは大馬鹿野郎だったっけ」

三十六度五分の体温で、俺は走り出していた。

夜暗に一燈を提げて、歩く人の背を覗む。追い越して、息を荒げて顔を覗きこむ俺は気味悪がられたが、他人を気にかける余裕は既になかった。雫さんの歩行速度が4 km/hだと仮定して円のイメージを——不毛な行為だと思いを切り捨てる。

「はあ……はあ……くそっ」

「お水どうぞ」

「ありがと……ふう」

絶妙なタイミングで水を手渡されたものだから、自然と飲んでいた。酸欠な頭も、一息つくくと冷静さを取り戻す。誰だこいつ？

「あつ、飲むんですね。それ、毒ですよ」

「んツくあ……!?!」

言葉が発しようにも、発声に必要な力が入らない。自律神経が狂ったのか、交互に来る猛烈な暑さと寒さの波に悶え苦しみ、脂汗が噴き出す。手に持っていた器を落とし、地面に転がった俺を見下ろす少年の足を、左手で強く握り締める。

「早く、楽になっちゃいなよ」

顎の辺りに鈍痛があつて、血の味が口に広がる。

そして、俺の意識は暗闇の中で途切れたのだった。